

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2026年4月1日発行
発行者 本多 弘之
編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）
〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11
TEL.03-3814-4900 FAX.03-3814-4901
e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp
ホームページ <https://www.shinran-bc.higashihonganji.or.jp/>
Facebook <https://www.facebook.com/shinran.bc>
X(旧Twitter) https://x.com/shinran_bc

2026.4
第92号

龍を氣遣うこと

親鸞仏教センター研究員 徳田 安津樹

『教行信証』化身土巻の末巻を読むとき、たびたび登場する龍たちの存在にどうしても目が引かれる。龍たちは、菩薩や梵天のような場の中心を担う者たち、つまり仏の言葉を伝えて教えの空間を開いたり、世界を護持する役割を担うような者たちを取り巻いている、「眷属」に属する。そのなかでも、外周に近いところにながら、場の担い手を必死に供養しているように見える。振り回されているようですらある。担い手たちが真に語るときには、龍たちも浄くあり、担い手たちが偽に語るときには、龍たちも煩惱に濁る。

私は、化身土巻の主題は「悪知識」論だと見ており、一貫してその視座から読み通すことができると考えている。ここでの悪知識は、仏に帰依しているように振舞いながら「他の過を見る」（『真宗聖典』初版373頁、第二版441頁 東本願寺出版）者たちである。自分を棚に上げながら、他人を誤っていると見なす。このような人びとは、きわめて厄介である。日頃はいかにもそれらしいことを語る。しかしひとたび論争の場に身を置くと、勝敗にこだわる本性を現し、「我が友に非ず（あなたとは友達になれませんね…）」（『真宗聖典』初版390-391頁、第二版462頁）、「正弁極談に非ずや（もう議論は終わってますけど?）」（『真宗聖典』初版393頁、第二版465頁）などと、聞くに堪えない言葉を平気で口にするのだ。

これは他ならない、私の問題である。教師として働く私は、教室が、生徒たちが互いを氣遣い、ケアし合う、誰一人として排除されることのない場になること——ひいては世界全体もそうなること——を願っている。しかしただ願っているだけでなく、それができるだけ実現するように努める責任を負っている。生徒もそのことを直観的に知っているだろう。少なくとも、教室を落ち着かせ、生徒が互いに憎み合わないようにする役割を教師は担っている。

しかしぎ教室に入ると、さまざまな念が渦巻く場の空気に巻き込まれ、そのことを忘れてしまう。面白く思われたい、自分の立場を守りたいといったほとんど無意識の思いから、汚い言葉を口走り、言い訳を漏らし、氣遣うべき相手への氣遣いを見失う。生徒がその瞬間を見逃すことはない。その目には緊張が走り、表情は失われる。「誰一人として排除されない世界」などうわべでしかないと感じ取ったのだ。その言葉を語る者が、その言葉自体に背いているのだから。このことが積み重なれば、互いを氣遣うことの意味を、誰も信じなくなるだろう。

結局、龍たちは救われるのだろうか。末巻はその顛末について何も語っていない。ただ場の担い手たちの責任を問うているだけである。

「廣大勝解の 正信偈に聴く」 開講にあたって

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



先の親鸞思想の解明では『一念多念文意』を拝読し、親鸞の思想の深さを思い知らされてきました。この度は「正信偈」の名前で真宗門徒に広く読まれている、親鸞作の信心の歌「正信念仏偈」を取り上げることにし、その講義題目を「廣大勝解の正信偈に聴く」としました。

このテーマを選んだ意図について、簡単に触れておきます。まず「正信偈」という名前についてですが、親鸞自身が付けている名は、「正信念仏偈」なのです。この偈は、親鸞の畢生の著書『顕浄土真実教行証文類』六巻の第二巻「行巻」の最後に置かれているものです。しかし親鸞自身がその一部を取り上げるにあたって、「正信偈」という略称を使っています（『尊号真像銘文』）。ですから、今回のテーマに「正信偈」を使うことといたしました。

テーマの「廣大勝解の正信偈」ですが、「廣大勝解」は、「正信偈」において親鸞自身が、如来の教えを聞いて本願の信心を得た人を、私は廣大勝解の者（ひと）と褒めてくださると言われています。この偈文の根拠は、『大無量寿経』に「聞法能不忘 見敬得大慶 則我善親友」（『真宗聖典』初版50-51頁、第二版54頁）と言われており、その文に加えるに、異訳『如来会』から「廣大勝解者」とあり、それらを『教行信証』「信巻」（『真宗聖典』初版245頁、第二版279頁）に引文され、それに依って、「正信偈」に「聞信如来弘誓願 仏言廣大勝解者」（『真宗聖典』初版205頁、第二版228頁）とまとめているのです。「信巻」には、仏陀釈尊が褒めている「廣大勝解のひと」とは、本願の教えを信じた人であり、その人は「真の仏弟子」であり「金剛心の行人」であるとも

述べられています（『真宗聖典』初版245頁、第二版278頁）。

この「信巻」の金剛の信心を得た人が「廣大勝解の者」であることは、後学の私たちにとって、「正信偈」の作者親鸞も「如来がお褒めになった人」である、と受け止めることができるということです。さらに言えば、「如来所以興出世 唯説弥陀本願海」という「正信偈」の文意を親鸞自身が取り上げて注釈している『尊号真像銘文』に、この如来を「諸仏」とされています（『真宗聖典』初版531頁、第二版650頁）。『無量寿経』の内容は、釈迦如来の説法であり、「教巻」の御自釈では、如来を「釈迦」としているのですが、この如来を「諸仏」と受け止められたのは、弥陀の本願海を受け止めて説き表すことが諸仏という意味になる、諸仏は弥陀を讃嘆することにおいて本願の心になう、その意味で諸仏如来は大乗仏教において、「廣大勝解」という仕事をされるのだ、と信じておられたに相違ありません。このことは廣大勝解のひとの伝統こそ、本願の歴史的事実である、ということなのでしょう。正像末和讃では以上の内容をまとめられて、

他力の信心うるひとを

うやまいおおきによるこべば

すなわちわが親友ぞと

教主世尊はほめたまう

（『真宗聖典』初版505頁、第二版617頁）

と述べてくださっています。そのことを「廣大勝解の正信偈」というテーマの下に聴いていきたいと思っています。

中世宗教思想と共同性

—スコラ哲学における
聖霊論をめぐって—

慶應義塾大学名誉教授 山内 志朗



筆者主宰の定例研究会・『教行信証』と共同性」研究会では、親鸞の主著であるとされる著作『教行信証』の読解を通じて、親鸞の思考を、自他関係あるいは共同性をめぐって展開されたものとしてとらえなおすことを目指している。2025年4月24日、本研究会の一環として外部講師招聘研究会を開催し、西洋中世倫理学・スコラ哲学を専門とされ、コミュニケーションや言語、共同体といった問題についても重要な思考を展開されている山内志朗氏をお招きして、キリスト教思想において他者との関係や共同体の成立に密接に関連する存在として位置づけられている聖霊をめぐって展開された、中世スコラ哲学の注目すべき思考についてお話しいただいた。当日の議論の詳細については、2026年6月刊行予定の『現代と親鸞』第53号所収の講義録をご参照いただくとして、ここでは以下、研究会を開催して感じた事柄を記すこととしたい。

(親鸞仏教センター研究員 大胡 高輝)

「聖霊の賜物は聖霊そのものである」

講義では、声のモチーフと聖霊との関係から、トマス・アクィナスの聖霊論、教を語る営為における聖霊の位置、さらにはペトルス・ヨハネス・オリヴィの経済思想まで、山内氏に多彩な論点をご紹介いただいた。講義全体を貫いていたと思われるのは、氏が提示された「聖霊の賜物は聖霊そのものである」というテーゼに象徴される、伝達可能性そのものを伝達する存在としての聖霊、あるいは自己を伝達するメディウム (medium medians) としての聖霊というイメージであった。山内氏はこのイメージをもとに、情報科学のキータームの一つである冗

長性 (redundancy) を中心として現代の社会的・思想的論点にも立ち入りつつ、発出・派遣や分有といった聖霊論の重要概念に対して、コミュニケーションや共同体の観点から一貫した示唆的な見通しを示されていた。

全体討議から——隣人愛・償い

また全体討議では、聖霊と関わる三位一体論における位格と人間との関係、キリスト教・仏教それぞれにおける情念の位置づけなどをめぐって、さまざまな議論が展開された。なかでも印象的であったのは、隣人愛の位置づけとの関わりで、キリスト教の伝統、とりわけ原始キリスト教団においては、神への愛を支える聖霊が個人ごとにはなく共同体に与えられるものとして位置づけられていたという山内氏のお話、また、聖霊の観念が他方では個人主義的な思想を支える側面をも持ち、そうした側面が、罪の償いをめぐってジャンセニズムやプロテスタンティズムがカトリック教会における告解とは異なる方法を探ってゆく歴史と連動している可能性が考えられるというご指摘であった。

講義・全体討議を通じて、山内氏には、超越的契機と共同性がどのように関わるのか、また悪や情念といった契機が宗教思想においてどのような意味を持つのかといった、本研究会の問題関心と関わる重要な論点について、より踏み込んで思考するための多くの手がかりを与えていただいたと感じている。

第72回 現代と親鸞の研究会

〈心〉のありか

—アルツハイマー型認知症からの問い—

「脳科学者からみたその人らしさとは何か」

脳科学者 恩蔵 絢子

「演劇とアルツハイマー 心の在りか」

劇作家・演出家・音楽監督 嶽本 あゆ美

2025年5月22日、親鸞仏教センターに恩蔵絢子氏と嶽本あゆ美氏をお招きし、現代と親鸞の研究会を開催した。アルツハイマー型認知症（以下、認知症）を課題にしたのは、記憶と能力が失われることで、自身のアイデンティティーや人間関係が崩れていく煩悶と、またその人との関係を再構築していく生々しい営みが存在するからであり、私たちにあって〈心〉の成り立つ場がどこにあるのかを、深く問うことができると考えたからである。二氏の発表と研究会全体を通して感じたことを記してみたい。

（親鸞仏教センター副所長 加来雄之）

恩蔵氏は、脳科学者の視点と認知症の母を介護した家族の視点を交叉させ、「その人らしさ」は科学（たとえばBig 5という指標）には乗ってこないものであるとしながらも、どこまでも脳科学者として認知症への負のイメージを払拭し、その本質を明らかにしようとした。母の介護体験や海馬を失った人たちの事例から、認知症の人も「私たちと同じように、分かるし、感情も動いている」こと、言葉の能力は衰えるが感情の力は高まること（感情伝染）を示し、記憶が定着しなくても豊かに暮らすこと、つまり或る人と場をつくれる喜び、自分がこの世界の一員である喜び、自分らを分かってもらえる喜びを実現できることを科学的に示された。さらに「その人らしさ」を成り立たせる〈心〉のありかは、「できなくなる」能力にではなく、最後まで残される「感情」に見出すべきことを訴えられた。

嶽本氏は、演劇『私の心にそっと触れて』を作った理由を「直接つながりのある他者との関



恩蔵 絢子 氏



嶽本 あゆ美 氏

係を通して蓄積された、ポジティブで魂に直接触れるような感情」である「愛」を確認したいと思ったからであるとし、認知症によって人間関係が失われることを私たちはしばしば恐れるとされた。このことは私たちが認知症という出来事に向き合うにあたり忘れてはならない視座であろう。また氏は、自身が体験したいくつかのケースを示し、認知症の人は、言葉にならなくても、人間のコミュニケーションを成り立たせているインナー・ダイアログをつぶやき、インナー・ピクチャーを持っているとされた。そしてこのことは演劇において俳優たちが役のために心を作り上げていく作業と重なり、演劇という活動を通して認知症の人たちの〈心〉を深く理解することができると語られた。

両氏の専門的な知見と自身の体験と実践、実証例にもとづく発表はきわめて説得力に満ち、私たちの心に響くものがあった。期せずして二氏がともに、認知症の人の懐く不安とコミュニケーションのあり方に眼差しを向け、認知症の人が安心できる関係という人間として当然の要求を生きていること、そしていわゆる言語を失ってもコミュニケーションの地平が厳として存在していることを、みずからの体験した事例を通して語られた。このことは、私たちが、形の見えない、複雑で重層的な〈心〉の「ありか」を探究しようとするとき、専門的な知見とともに具体的な体験知にもとづかなくてはならないことを示唆している。そもそも〈心〉を問うことは、愛し、悲しみ、悩み、喜び、そしてこの人生でなにかを成し遂げようとする、そういう生々しいことが起こってくる現場の一番の根っここのところにあるもの、それを私たちがどう捉えるのかということに外ならないのであろう。

第7回「現代と親鸞」公開シンポジウム

「分断のその先へ — 対話を通して探る 新たな関係性—」

親鸞仏教センター嘱託研究員 長谷川 琢哉

国内外を問わず、「分断」は現代社会において最も深刻な問題のひとつである。政治的立場や価値観をめぐって対立する人々が互いの主張を否定しあい、そうした人々の間で対話が極めて困難となっている状況を私たちは頻りに目にしている。しかし分断が深刻であればあるほど、相互理解・相互承認を模索する試みの重要性は増しているとも言えるだろう。そこで2025年6月28日に開催された本シンポジウムでは、互いの意見に耳を傾け、異なる価値観を認め合うための手がかりを探ることを試みた。様々な領域で活躍する登壇者・コメンテーターをお招きし、分断の先にあるであろう新たな関係性について議論を交わした。

以下では、それぞれの発表要旨とそれに対するコメント、および質疑応答の一端を報告する。

小山 淑子 (早稲田大学社会科学総合学院准教授)

「東アジアの歴史をめぐる 越境的な教育実践」

小山氏は、自身が進めている、日中韓三国の学生による共同の歴史教科書記述に取り組む授業実践の事例を紹介し、国境を越えた歴史認識の再構築の可能性と、そこから見えてくる課題を提示した。学生たちはトランスナショナルな視点から既存の歴史を脱構築し、未来のための歴史記述を目指すようになった。他方で、自らの加害者性を扱うことの困難が課題として現れた。加害者／被害者の枠組みは実際には複雑に絡み合っており、そうした複雑な現実をいかに受け止めるのかが大きな問題となる。

勝又 栄政 (日本学術振興会特別研究員・トランスジェンダー当事者)

「拒絶から共存へトランスジェンダー のカミングアウトと家族の葛藤—」

勝又氏はトランスジェンダー当事者としての経験から、カミングアウトをめぐる家族、とり



わけ母との葛藤と共存について報告した。社会が当然視する異性愛規範・男女二元論の中で、自身は性自認の一致に苦しんだ。母へのカミングアウトはひとつの希望であったはずだが、母からすると子に対する理想像が崩壊する出来事だった。両者の「分断」は極めて深刻だったが、互いの「人生の文脈」を確かめ合うことにより、「理解する」とまではいかなくとも、「共にいる」ことの重要性に気づくに至った。

高 海史 (川越少年刑務所教諭師・全国教諭師連盟副理事長・親鸞仏教センター元研究員)

「施設 (分断) から社会復帰へ — 被收容者の抱える不安—」

高氏は教諭師としての活動経験から、被收容者が抱える「存在の不安」と向き合う重要性について報告した。被收容者たちはさまざまな不安を抱えている。この不安が自分自身の存在を尋ねさせる原動力となっている。罪に向き合うことの困難さを抱えながら、加害者と被害者は同じ社会で生活しなければならない。人間は自分のいのちをコントロールすることができない。だからこそ互いに話さずにはいられないのである。

コメンテーター

本間 美穂 (株式会社 LITALICO 障害者就労支援員)
繁田 真爾 (親鸞仏教センター嘱託研究員)

コメントおよび討論では、被害者／加害者という境界線をいかに超えるのかという論点が焦点のひとつとなった。境界線を引くことは人が生きていく上で必要ではあるが、現実的には被害者／加害者の枠組みはマーブル状となっている。被害者であることを免罪符にすることには怖さもあり、時として決着をつけないことが決着となるといった視点も見えてきた。

えて、無上大涅槃のさとりをひらくなり。信心を浄土宗の正意とするべきなり。このころをえつれば、他力には義のなきをもって義とすと、本師聖人のおおせことなり。義というは、行者のおのおののからうところなり。このゆえに、おのおののからうところをもつたるほどをば自力というなり。よくよくこの自力のようをこころうべしとなり。

正嘉二歳戊午六月廿八日書之 愚禿親鸞八十六歳

《語註》

五悪趣：悪業の報いとして趣く五種の苦しみの世界。①地獄②餓鬼③畜生④人⑤天をいう。

自力：自分自身を正しいと思ひ、自身の素質や経験、能力等を頼みとするあり方。

現代語化をめぐる

親鸞は、「獲信見敬得大慶」の一句について、「この信心をえて、おおきによろこびうやまう人というなり。大慶は、おおきによろこびことをえてのちに、よろこびというなり」と解説する。ここでは、「おおきに（大いに）」という言葉が、二度繰り返し使われていて、二度目は「よきことをえて」に係る、と受け取れるということに注目したい。その「おおきに」よきことをえてのちに、よろこびは、一体何をえてよろこんでいるのだろうか。

まず、原文の「獲信」を受けて、「この信心をえて」が土台となつて、よろこんでいるということを読み取れる。さらに、原文の「得」という語に対応しながら、「おおきに」よきことをえてのちに、よろこび「と、そこに展開がある」と見てもよめるのではないか。親鸞には、「獲」の字は、因位のとらきうるを獲という。得の字は、果位のとらきにいたりてつることを得というなり」（東本願

寺出版、『眞宗聖典』以下、『聖典』初版五一〇頁、第二版六二五頁）という「獲」「得」についての解釈がある。つまり親鸞は、「獲信」（因）、「得大慶」（果）という並びで、因果の関係を表現しようとしているように思われるのである。

『正信偈』の銘文の文言を遡ると、親鸞は、「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃」の「得涅槃」について、「無上大涅槃をさるるをつる」（『聖典』初版五三三頁、第二版六一頁）と解説している。その現代語化にあたって、「無上大涅槃をさるる」とは、「むこう側・法蔵菩薩が、正覚を取り、無上大涅槃をさるる」という位置で受け取った。そして、「つる（得）」については、「むこう側・我々衆生が、煩惱息定の凡夫の自覚において、その無上大涅槃のはたらきを我が身に受けとめる」と了解した。親鸞は、そういった本文の流れを受けて、結びの二句、「獲

いはたらきによつて、「生死」という迷いの苦しみとしての大海原を、速やかに一挙に超えて、仏のこの上ない大いなる涅槃というさとりと同質のさとりを、信心において開くのである。よつて信心こそが、源空（法然）聖人の明らかにした浄土宗の本意であると知ることができるのである。この本意を得ているので、「他力においては、こちらの立てる義が存在し得ないことをもつて、本来の義とする」というのである。これは、根本を明らかにした師・源空聖人の仰せの言葉である。こちらの立てる「義」というのは、信心の行者がそれぞれに思ひはからう心である。こういうわけで、それぞれがはからいの心を持つている状態こそ自力というのである。十分に注意して、この自力のあり様について、心得ておなくてはならないことである。

正嘉二年六月二十八日、これを書く。 愚禿親鸞八十六歳

信見敬得大慶 即横超截五悪趣」の核心を、「信をつる人は、(略)生死の大海をやすくよこさまにこえて、無上大涅槃のさとりをひらくなり」という自身の解説の言葉で、押さえたのだと思われる。

要するに、阿弥陀如来の本願と出遇い、「眞実信心」を獲得することを因として、「無上大涅槃のさとり」という証果を得る。すなわち、阿弥陀如来の正覚、「無上大涅槃」といふさとりと同質のさとりを、我々衆生は眞実信心において開く。それはまた、私たち自身の上に成り立つ信心において、阿弥陀如来の因位・法蔵菩薩の願心と同質の「願い」が開かれてくることであると、了解した。よつて、「おおきに」よきことをえてのちに、よろこび「とは、無上大涅槃のさとりをひらく」といふ証果を得る。そのような質の「よろこび」であると、受けとめた。

問題提起

「正信偈」の銘文の五回目、最終回は、親鸞が「獲信見敬得大慶 即横超截五惡趣」の二句を解説した部分に焦点を当てる。親鸞は、「尊号真像銘文」を結ぶにあたり、「他力には義のなきをもって義とす」という師・源空（法然）聖人の仰せの言葉に立ち返る。ここは文脈的に、信心の本意を問題にしているところである。よって、その「他力には」以下の表現は、信心に関わる立場をあらわすものだと思われる。つまり、眞実信心とは、本願他力を根拠とするのであり、各々のはからい・自力

の心を頼みとするのではない。本願他力のはたらきを我が身に受けとめると、こちら側の自我が立てる「義」は無効になる。すなわち「無義」「無我」になる。そういった「本来の義」を師・源空聖人は明らかになさったのだと、親鸞は見極めていたのだらう。思うに、先の「他力には義のなきをもって義とす」の「義のなき」とは、自力がなくなるという意味ではなく、本願他力のはたらきの中で、自力があることを心得ることによって、自力の心を離れるということなのではない

か。すなわち、自己中心的に分別し執着する心の否定をくぐる。それが決定的に大事だということなのだろう。逆に言えば、自己否定をくぐらないような信心は、たとえ「横超」「願力」「他力」という言葉を万言連ねても、それらは全て自らの思い描いた観念であり、実存の救いにはなり得ない。親鸞は、「よくよくこの自力のようをこころうべしとなり」という結びの文に、親鸞自身の自力の在り方の自覚・懺悔の念を込めて、そのようなメッセージを発信してくださっているのだと受け取りたい。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 菊池弘宣）

【原文】

和朝愚禿釈の親鸞が『正信偈』の文

「本願名号正定業 至信心樂願為因 成等覺証大涅槃 必至滅度願成就 如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁惡時群生海 応信如来如実言 能発一令喜愛心 不断煩惱得涅槃 凡聖逆誘齊回入 如衆水入海一味 撰取心光常照護 已能雖破無明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆眞実信心天 譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇 獲信見敬得大慶 即横超截五惡趣」文（中略）※中略部分は『親鸞仏教センター通信』第八八号〜第九一号に掲載

「獲信見敬得大慶」というのは、この信心をえて、おおきによりこびうやまう人というなり。大慶は、おおきにうべきことをえてのちに、よろこぶというなり。「即横超截五惡趣」というのは、信心をえつればすなわち、横に五惡趣をきるなりとするべしとなり。即横超は、即はすなわちという、信をうる人は、ときをへず、日をへだてずして正定聚のくらいにさだまるを即というなり。横はよこさまという、如来の願力なり。他力をもうすなり。超はこえてという。生死の大海をやすくよこさまにこ

【現代語】

「和国」の愚禿釈の親鸞の『正信偈』の文 ※銘文の全文は略する。（中略）※原文参照

「獲信見敬得大慶」とは、この信心を獲得して、大いによりこび敬う人ということである。「大慶」は、大いに得るべきことを得た後に、よろこぶということである。「即横超截五惡趣」とは、信心を獲得しているので、即ち阿弥陀如来の本願のはたらきに包まれて、横様に五種の迷い苦しむ世界を断ち切ると、知らなくてはならないというのである。「即横超」は、「即」は「すなわち」ということである。信心を獲得する人は、時を経ず、日を置くことなく、「正しく仏に成ることが定まった者のあつまり」に、その位につくことを「即」というのである。「横」は「よこさま」阿弥陀如来の本願のはたらきのことである。つまり、「他力」のことを申ししているのである。「超」は「こえていく」。阿弥陀如来の本願他力と

「近現代の真宗をめぐる人々」第24回 (廣小路亨 [1908~1988])

愛知県刈谷市に生まれた廣小路は、23歳のとき京都・山崎の聞法寺に入寺し、その後1938年に旧制大谷中学校（現在の大谷中学・高等学校）の教諭となり、1947年から30年にわたって同校の校長を務めた。戦後における真宗大谷派の宗教教育の土台を築き上げた人物の一人である。

廣小路が強調するのは、学校教育制度における私学の特殊な地位と責任である。近代教育の最大の課題は、政教分離政策によって宗教が生活から切り離されて特殊な領域として狭められたことで、人間生活を成り立たせる根本が忘却されてしまったことにある。それゆえ戦後に私学での宗教教育が解禁されたことは意義深いことであり、だからこそ廣小路は、親鸞聖人の教えに基づいて人間形成を行うことを「建学の精神」とする真宗大谷派の関係学校では、管理職や宗教科担当といった特定の教員だけでなく、事務なども含む全職員が宗教教育を自身の根本問題として受けとめ、考えていかなければならないと訴える。このテーゼは、大谷派宗教教育の基本姿勢として現在も継承されている。

廣小路は、自分にとって生徒たちが「十方恒沙の諸仏」であったと述懐する。生徒たちから励まされ、慰められ、ときに横着な心を打ち砕かれ、そのようにして何千人もの生徒一人ひとりから教えられたのだという。生徒は教えるべき相手なのではなく、むしろ、教えられ、かつそのことに喜びを見出しうる存在なのである。廣小路は教育を「人間が人間を人間にまでつくり上げる活動」とする定義を引用しているが、これはもはや「教師が生徒を～」という一般的な意味では理解しえないだろう。生徒を諸仏と仰ぐという真の意味での人間関係に基づくなら、逆説的だが、人間はむしろ教師であることによって人間となっていく——生徒にそうならせてもらう——はずである。大谷派宗教教育の豊かな教師論は、廣小路なしに考えることはできない。



廣小路亨『加齢のこみちで』
(廣小路先生傘寿記念出版会、1988年)

(徳田 安津樹)

人事異動の報告
(2025年7月~8月)

再任

嘱託研究員
菊池 弘宣
(2025年7月1日付)

嘱託研究員
越部 良一
(2025年8月1日付)

出版情報

- 雑誌『アンジャリ』第45号
(2025年12月発行)

特集〈よりどころ〉はどこにあるのか

【執筆者】

特集：田中瑛/辻浩平/栖来ひかり/
柳澤田実/河野有理

Essais：マーサ・ナカムラ/北川真也/金承福

連載：本多弘之 交差点：大胡高輝/繁田真爾

- 研究誌『現代と親鸞』第52号
(2025年12月発行)

- ・ 研究論文 大胡高輝/徳田安津樹
 - ・ 「宗教と教育」研究会（報告）岡野八代
 - ・ 親鸞と中世被差別民に関する研究会（報告）高橋昌明
 - ・ 連続講座「親鸞思想の解明」（報告）本多弘之
- ※敬称略

